

講演 1

## 方言をどう生かすか ― 教育・継承の現在 ―

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員 竹田 晃子

現在、日本国内では「方言」が消滅の危機に瀕しており、かつて学校教育の現場で教員を嘆かせた日本語の地域差は、いまや共通語に塗りつぶされようとしている。その状況下で、日本語研究者の多くは、廃れていく方言の歴史的価値を記録保存し、採集した方言を科学的に分析することで日本語史を再構築する研究を学問としておこなってきた（大野2015）。一方、方言の話し手（方言話者）は積極的に保存・継承活動を行っている場合があり、一概に方言が消滅する状況を放置しているわけではない。そのような場では、日本語の研究者は、自らの研究や研究分野を通じて、彼らの活動を支援するという新たな役割やその方法論を求められることになる。

地域方言を次世代に残していくためには、方言を調査・収集して残す記録保存のみでは効果がない。方言研究者が地域の言語文化継承を支援するためには、次のような3段階のポジティブ・アクションが想定される（大野・竹田・小島2018a）。

- ①研究成果ではなく、学習材として活用可能な方言資料を作成する。
- ②標準語教育や全国共通語化で形成された、方言に対する消極的態度の転換を支援する。
- ③学校教育と連携した方言使用場面の保持と生成を図る。

今回は、2013年以降に発表者がかかわった取り組みを事例として報告しつつ、聴衆のみなさんと共に、これからの「方言」の教育と継承のありかたや方策について検討を試みた。

具体的事例として、筆者が関わってきた岩手県内での取り組みで、(1) 方言で昔話を語る会の活動支援（釜石市）、(2) 小学校での方言の授業と教材（釜石市）、(3) 中学校での方言演劇（宮古市田老地区）、(4) 方言イベント（盛岡市）を紹介した。(1)～(3)は「おらほ弁で語っぺし」関連プロジェクト（2013年度～・文化庁「被災地の方言活性化支援事業」、大野眞男（岩手大学）・小島聡子（同）と共同）である。これらの取り組みの主役は、方言で昔話を語る「漁火の会」と、

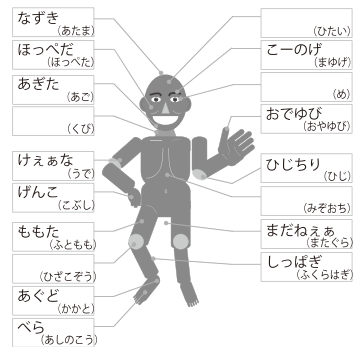


図1 釜石市内小学校での授業（左：授業風景、右：学習材の一部）（2018年11月13日）

地元の小学生・中学生たちである。彼らを主演とし、われわれ研究者は、①地域に眠っている資料を活用した方言学習材の作成（図1右）、②地域の方々との連携しつつ方言に対する消極的態度を転換するイベント等の企画・運営（図2）、③学校教育と連携した方言使用場面を保持するための出張授業（図1左）、④方言をまじえた劇の上演サポート（図3）を行ってきた。（4）は、盛岡市在住のシンガーソングライター・田口友善氏によるイベント企画（2015年～「盛岡弁予備校」「オラホの盛岡弁塾」）やラジオ番組（2016年～「まじえ5時」NHK盛岡放送局）で、さまざまな方言を楽しく取り上げ、方言の楽しさや使う場面を観客やリスナーと共有することで、方言に対する消極的な姿勢や状況を和らげようとしている。

方言は、地域や集団への帰属意識や誇りと密接に結びついている。この結びつきを方言の重要な役割として理解することは、他者・他地域・異文化に対する理解と尊重にも通じるものである。方言の教育と継承をこの文脈でとらえなおすことで、多様化する日本社会のありかたに対応するための方策も得られるのではないだろうか。今後も、取り組みを通じて考えていきたい。



図2 南部弁サミット in 釜石



図3 方言劇上演の様子2017年

### 【引用文献等】

大野眞男（2015）「方言の継承における研究者の役割」大野眞男・小林 隆 編『方言を伝える— 3.11東日本大震災被災地における取り組み—』ひつじ書房、pp.3-21

大野眞男・竹田晃子・小島聡子（2018a）「岩手県沿岸被災地の小・中学校における方言理解教育の支援」第2回実践方言研究会（2018年5月19日（土）、於：明治大学）

一五 大野眞男・竹田晃子・小島聡子（2018b）「方言語彙の継承と教育」小林隆編『方言の語彙— 日本語を彩る地域語の世界—』朝倉書店、pp.162-176

竹田晃子（2015）『郷土教育資料が語る昭和初期の釜石のことば』（平成26年度文化庁委託事業：被災地の言語文化資料、岩手大学）

NHK盛岡放送局「まじえ5時」（<http://www.nhk.or.jp/morioka/maje/>）（2019/01/23現在）